

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月4日現在

機関番号：12601
 研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21330109
 研究課題名（和文） 「日本の財務会計研究の棚卸 ―国際的な研究動向の変化の中で―」
 研究課題名（英文） An Inventory of Financial Accounting Research in Japan
 : Under the Changing Circumstances on Accounting Research
 研究代表者
 大日方 隆（OBINATA TAKASHI）
 東京大学・大学院経済学研究科・教授
 研究者番号：20224305

研究成果の概要（和文）：

日本の従来からの財務会計研究を、研究の方法・対象・主題にもとづく基準により分類した。その結果、「規範的・記述的研究」が過半を占め、「実証・実験研究」が増加傾向にあるが、研究方法が明確でない論文が多いという知見をえた。また、科学性を軸に据えた分類により、「規範的・記述的研究」の多くが学術的研究としての条件を十分に満たしていないことが判明した。そこで、日本のこれからの財務会計に関して、研究・教育に着目し、標準的な査読基準の作成や仮説の構築・改善の必要性などを提言した。

研究成果の概要（英文）：

We classify prior financial accounting studies in Japan by focusing on the research method, objectives and theme. From our survey, we find that “normative and descriptive research category” is the mainstream, and the number of papers belong to “empirical research category” is increasing. However, many papers are not based on the precise methodology. In addition, we re-classify the studies in the mainstream by the criteria of scientific progress. As a result, most of the papers don't satisfy the prerequisites for the academic research. Therefore, we propose a concrete plan to make a standard of the peer review, and show the desirable way how to develop the robust hypothesis and construct the consistent theory.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
21年度	5,700,000	1,710,000	7,410,000
22年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
23年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
年度			
年度			
総計	14,400,000	4,320,000	18,720,000

研究分野：会計学

科研費の分科・細目：経営学・会計学

キーワード：研究方法，科学的方法，パラダイム，財務会計研究，査読制度

1. 研究開始当初の背景

(1) 会計基準の国際的な収斂が進む状況下において、日本の過去の財務会計研究を点検し直し、将来の研究につなげるための長所・短所を抽出する必要性が高い。

(2) 社会制度の1つである会計を対象とする

会計学において、時代の変化・要請とともに同じ問題が繰り返し提起されることがある。従来からの財務会計研究を、研究方法・対象・主題による現在の視点から分類・体系化することで、将来の研究上の論点や注力すべき点が明瞭になる。

2. 研究の目的

(1) 過去から現在に至る、日本の財務会計研究を分類・体系化し、歴史的な変化や特徴を抽出すること。

(2) 従来の全体像を踏まえて、将来の日本の財務会計研究にとって、より有益な研究領域を選別し、国際競争力の向上に貢献すること。

3. 研究の方法

本研究は、日本の過去の財務会計研究のサーベイにもとづく独自の分類基準の設定、当該基準による過去の研究の分類・体系化、およびその結果にもとづく解釈と将来に向けた提言により構成される。以下、分類基準の設定および分類基準について概説する。

(1) 分類基準の設定

第1に、研究方法による大分類、および従来の財務会計研究の過半数を占める「規範的・記述的研究」について、研究対象・研究主題による中・小分類を作成した。複数人での相互検証、反復的なフィードバック作業、および数年間分のサンプリング調査などにより、客観性や信頼性を可能なかぎり高めるよう努めた。

第2に、「規範的・記述的研究」を、科学性(科学的方法)の観点から細分類した。日本の財務会計研究の主力である当該研究について、学術研究としての条件をどの程度満たしているのかを検証するためであった。

(2) 分類

① 研究方法・対象・主題による分類

以下の図表1は、おもに研究方法に着目した大分類である。そのほか、研究対象・主題による中・小分類を作成した。

図表1 大分類

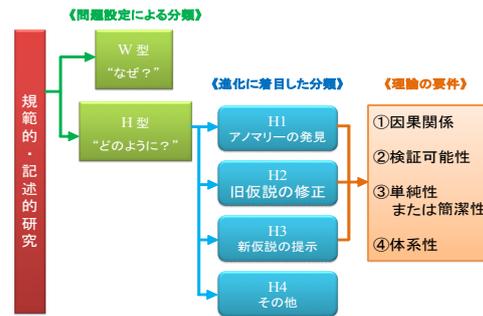
和名	英語名
1 理論研究	Analytical Research and Methodology
2 実証・実験研究	Empirical Research
3 規範的・記述的研究	Normative and Descriptive Research
4 歴史研究	Historical Study
5 事例研究	Case Study
6 その他	Miscellaneous
6-1 教育	Accounting Education
6-2 監査・企業統治・内部統制	Auditing / Corporate Governance / Internal Control
6-3 税	Corporate Tax
6-4 公会計	Governmental and Nonprofit Accounting
6-5 その他	Others

② 科学性(科学的方法)による分類

①の分類では、研究の進展や国際競争力の程度を検討する材料とはならない。そこで、「規範的・記述的研究」について、図表2の

分類プロセスを設定した。第1に、社会現象に関する疑問を客観的な事実の裏づけにもとづいて検証するW型と、それ以外である社会現象について事実との整合的な解釈を志向するH型における「問題設定」による分類である。第2に、H型について、旧仮説(通説)の批判(H1)、旧仮説の修正・補強(H2)、新仮説の提示(H3)、およびその他(H4)における「仮説の進化」に注目した分類である。

図表2 科学性による分類



4. 研究成果

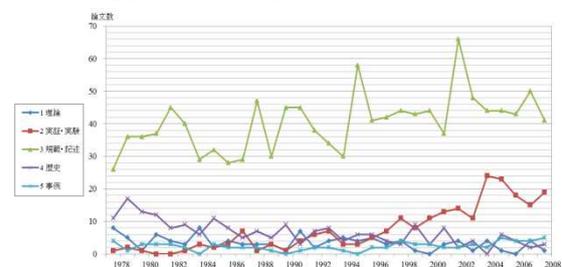
本研究の成果として、研究方法・対象・主題による分類結果、および科学性による分類結果を概説する。さらに、査読制度や教育に関する提言、および科学的研究としての規範的・記述的研究の成立可能性についての提言を要約する。

(1) 分類

① 研究方法・対象・主題による分類

日本の財務会計研究の代表例として雑誌「会計」掲載論文を対象とし、31年間分を調査した。その結果、大分類では一貫して「規範的・記述的研究」が大勢を占めていること、「理論研究」「歴史研究」が逡減していること、および「実証・実験研究」がとりわけ1990年代後半から増加傾向にあることがわかった。

図表3 大分類による論文数の推移



② 科学性(科学的方法)による分類

W型に分類された論文は0.31%であり、ほとんどがH型であった。さらに、H1型は4.6%、H2型は16.7%、およびH3は23.2%

となった。1990年代以降H3型が減少しH2型が増加しているようにもみえるが、一定の傾向は見いだせなかった。なお、55.6%がH4型「その他」であり、仮説の構築・修正等を意識していない研究が過半数となった。

(2) 社会貢献

学術的な知見の獲得に貢献する一義的目的のほか、社会制度の1つである財務会計を研究するに際して、会計基準設定、会計教育、およびパラダイム効果といった社会的役割も存在するため、これらについて検討した。

諸研究によってパラダイムが形成・強化・転換され、そのパラダイムを通じて制度・基準設計がなされ、それがまたフィードバックして研究に影響を及ぼすという循環過程の存在を指摘した。さらに、会計専門家の専門性の強化が求められる現在、必要とされる会計教育のあり方を述べた。

(3) 提言

① 査読制度・研究者養成プログラム

「規範的・記述的研究」のみならず「実証・実験研究」も含めて、「科学性」を含めた査読基準を研究者が共有し、また査読付き学術誌を利用しながら、研究の質の向上に向けて取り組むことを具体的に提言した。

② 規範的・記述的研究の要件

「規範的・記述的研究」において、共有のパラダイムに則ること、追体験可能であること、つねに経験的な世界とのつながりを意識すること、の3つを要件に掲げた。

自身の研究の位置づけを示して、先行研究における仮説をどのように改善するかを提示するうえで、先行文献との関連づけの明確化が必要であること、学問的な論争を通じて仮説を進歩させるためには、論文の書き方（読み方）と査読基準が標準化され、かつ、学界に共通の尺度として定着している必要があることの2点を強調した。

③ あるべき規範研究

真の意味での規範的研究とは何かをあらためて問い直し、従来の個人的な信念・価値観を排除しつつ、経験的な証拠を踏まえた研究、すなわち科学的研究としての規範的研究の成立可能性を具体的に探った。

④ 先行研究・古典文献

先行研究を参照することの重要性を再確認したうえで、古典講読の有益性を、研究方法の習得、論理的な思考力・発想力の養成、および研究対象を相対化の観点から検討した。

さらに、理論研究を中心とした古典リストを作成し、講義に利用可能なシラバス形式で

提示した。

⑤ 本研究の総括

「科学的説明」たりうるためには、会計基準を原因や結果とする因果連関が仮説として記述され、かつ、その仮説が経験的にテストできなければならない。仮説の「もっともらしさ」は、仮説の検証（代替仮説の棄却）によって高められてゆくべきである。

なお、本年度内に研究成果を書籍として刊行する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計16件)

- ① 大日方隆, 利益情報のアノマリー: 利益情報の有用性は神話か? 経済学論集(東京大学経済学会), 査読無, 77巻3号, 2011, 2-63
- ② 大日方隆, IFRSと公正価値会計, 会計・監査ジャーナル, 査読無, 23巻8号, 2011, 65-71
- ③ 徳賀芳弘, 会計基準における混合会計モデルの検討, 日本銀行ディスカッション・ペーパー, 査読有, 2011, 1-58
- ④ 徳賀芳弘, 日本の会計規範を巡る現在の検討課題とその解決策, 会計, 査読無, 181巻1号, 2012, 32-45
- ⑤ 米山正樹, 財務報告基準への展望, 会計, 査読無, 181巻1号, 2012, 46-59
- ⑥ 大石桂二, 会計基準設定のアウトソースと会計基準設定機関の変化, 企業会計, 査読無, 64巻1号, 2012, 26-32
- ⑦ 大日方隆, 会計機能から見た会計基準の論点, 企業会計, 査読無, 63巻1号, 2011, 86-92
- ⑧ 徳賀芳弘, IFRSへの日本の制度的対応: 規範的アプローチからの提言, 会計, 査読無, 177巻5号, 2010, 9-22
- ⑨ 万代勝信, 規範的・記述的研究の社会貢献, 会計, 査読無, 179巻1号, 2011, 28-38
- ⑩ 米山正樹, SFAS第157号にもとづく公正価値情報の価値関連性, 会計, 査読無, 178巻5号, 2010, 14-27
- ⑪ 米山正樹, 公正価値会計の理論的基礎: Nissim and Penman[2008]を中心として, 産業経理, 査読無, 70巻4号, 2010, 73-82
- ⑫ 大石桂二, 1930年代の米国における会計規制の展開, 会計史学会年報, 査読有, 28号, 2010, 51-69
- ⑬ 大石桂二, 国際的会計基準の形成と円フオースメント, 会計, 査読無, 179巻1号, 2011, 14-27

- ⑭ 徳賀芳弘, 公正価値会計の行方—パラダイム転換の分岐点としての金融負債の公正価値評価, 企業会計, 査読無, 61 巻 2 号, 2010, 18-21
- ⑮ 米山正樹, 会計基準の国際的な統合化とディスクロージャー制度, 租税研究, 査読無, 716 号, 2009, 120-137
- ⑯ Akinobu Shuto, Tomomi Takada, Managerial Ownership and Accounting Conservatism: Empirical Evidence from Japan, Journal of Business Finance and Accounting, 査読有, 2009, Vol.37, Issues 7-8, 815-840

[学会発表] (計 5 件)

- ① 米山正樹, 財務報告基準への展望, 日本会計研究学会第 70 回大会, 2011 年 9 月 18 日, 久留米大学
- ② 小川淳平, 金融負債の公正価値評価の影響—Citigroup の事例—, 日本会計研究学会第 70 回大会, 2011 年 9 月 18 日, 久留米大学
- ③ 徳賀芳弘・大石桂一・大日方隆・澤邊紀生・首藤昭信・万代勝信・米山正樹・小川淳平, 課題研究委員会報告「日本の財務会計研究の棚卸し」, 日本会計研究学会第 69 回大会, 2010 年 9 月 8 日, 東洋大学
- ④ Masaki Yoneyama, An Inventory of Financial Accounting Research in Japan: Under the Changing Circumstances on Accounting Research—Summary of the Final Report by the Subject Research Committee of JAA—, 台湾会計学会 (TAA), 2010 年 12 月 9 日, 淡江大学 (Tam Kang University)
- ⑤ 徳賀芳弘・大石桂一・大日方隆・澤邊紀生・首藤昭信・万代勝信・米山正樹・小川淳平, 課題研究委員会報告「日本の財務会計研究の棚卸し」, 日本会計研究学会第 68 回大会, 2009 年 9 月 2 日, 神戸国際会議場

[図書] (計 4 件)

- ① 大日方隆, 首藤昭信, 秋葉賢一, 大石桂一, 八重倉孝, 草野真樹, 米山正樹, 山田康裕, 中央経済社, 金融危機と会計規制: 公正価値測定 of 誤謬, 2012, 482
- ② 大日方隆 (編著), 中央経済社, 会計基準研究の原点, 2012, 387
- ③ 徳賀芳弘・大石桂一・大日方隆・澤邊紀生・首藤昭信・万代勝信・米山正樹・小川淳平, 日本会計研究学会課題研究委員会 日本 of 財務会計研究の棚卸し 最終報告書, 2010, 247
- ④ 徳賀芳弘・大石桂一・大日方隆・澤邊紀生・首藤昭信・万代勝信・米山正樹・小

川淳平, 日本会計研究学会課題研究委員会 日本 of 財務会計研究の棚卸し 中間報告書, 2009, 120

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大日方 隆 (OBINATA TAKASHI)
 東京大学・大学院経済学研究科・教授
 研究者番号: 20224305

(2) 研究分担者

徳賀 芳弘 (TOKUGA YOSHIHIRO)
 京都大学・大学院経営学研究科・教授
 研究者番号: 70163970

(3) 連携研究者

万代 勝信 (MANDAI KATUNOBU)
 一橋大学・大学院商学研究科・教授
 研究者番号: 80209709

澤邊 紀生 (SAWABE NORIO)
 京都大学・大学院経営学研究科・教授
 研究者番号: 80276481

米山 正樹 (YONEYAMA MASAKI)
 早稲田大学・商学学術院・教授
 研究者番号: 00276049

大石 桂一 (OISHI KEIICHI)
 九州大学・大学院経済学研究院・准教授
 研究者番号: 19530408

首藤 昭信 (SHUTOU AKINOBU)
 神戸大学・経済経営研究所・准教授
 研究者番号: 60349181

清水 泰洋 (SHIMIZU YASUHIRO)
 神戸大学・大学院経営学研究科・教授
 研究者番号: 80324903

小川 淳平 (OGAWA JUNPEI)
 名古屋市立大学・大学院経済学研究科・准教授
 研究者番号: 00453077